





朝鮮

異聞

二編

繪本朝鮮異聞二篇

訥亭 岡本 湖月 編

花房公使の一行ハ賊の圍ミを切抜けて二十四日の朝
 咸谷里なる百姓家ニ飢を凌ぎ再び雨を冒して立ち出
 つ、午後三時仁川府ニ着し、府使鄭志鎔出でむる
 へ、自ラ政堂を開きて公使の休憩所となし、あつら
 へし衣をわづとして公使の濡きるる服ニ替へ茶を供た
 るなど懇切なる取置扱ひ、一同ハ安心しぬき、る服
 を脱ぎて乾し、今やその勞れを休めりし、免横みたりし

朝鮮

異聞

二編



繪本朝鮮異聞二篇

訥亭 岡本 湖月 編

花房公使の一行ハ賊の圍ミを切抜けて二十四日の朝
 咸谷里なる百姓家ニ飢を凌ぎ再び雨を冒して立ち出
 つ、午後三時仁川府ニ着し、府使鄭志鎔出でむる
 へ、自ラ政堂を開きて公使の休憩所となし、何んぞ
 一衣をわづりて公使の濡きする服ニ替へ茶を供せ
 るなど懇切なる取置扱ひ、一同ハ安心しぬき、服
 を脱ぎて乾し、今までの勞れを休め、免横みなりし



ちや窺入くるものもありしるが午後五時ごろともか
 がいたころ門前俄く入騒がしくドツと揚けしる鯨波
 よかどろを覺めて人々の脱ぎしる服を付ける間もな
 く門前の休所は居る。巡查遠矢庄八郎が満身血に染
 らせ驅け来り賊兵再び寄せ来きり御油断のるなと
 知らせの迹より同五十嵐惠吉も反つしる刀を杖み
 てヨロメキく来るを見せば苦戦の様は知らまじり
 様子はいくにと問ふまじりなまじり。巡查横山貞夫も来
 たり政堂の門を閉ぢて始めてホツと息を吐き賊徒が

我が不意を襲ひ巡查廣戸昌克宮銅太郎數名死に速く
 一方を切りやぶりて出でんが圍みの容易に脱し
 ざしらん。三氏の告げよ一同の切齒しするに府兵
 も賊と合ししるの今にせしやなりと隊伍を立て
 て外に出せば政堂の前後に暴徒を立ちて矢石銃砲
 打ちをなす。打ちあけし事ともせば花房公使を中
 圍にて一同必死をなす。表門口を面も振り切つて
 出づまば思ふよの似ぬ臆病のみよて道を開いて左右
 より銃砲を打つ。このまじり辛くして重圍を出で疾く



浅山頭藏

岡兵一

花房公使



暴徒再び
仁川府より

遠矢庄八郎

休息の
巡査

急を

公使よ

告る圖

五十嵐惠吉

走はりて濟物浦の道へ出いきバ賊ハ残のこらバ一手ひとて又また有りて
 跡あとを慕もひ花房公使云々と呼よびたりながら石いしを投なげ眉まゆ尖とが
 刀やいばを揮ふるひ餘あまりもたを追おうけり岡警部小林巡查ハ
 殿とのりして近ちかづく敵てきを三四人狙あひを外そとさけりち倒たせば
 チリくバツと逃にげ散ちりてハ集ありて追おひ来きり近ちかづ
 けば短銃たんじゆうを先まき進まむ賊てきを打ち逃にげきバ此方こなたも行
 く方かたを止め追おつ返かへり十四五町じゅうごうちやうも来きり向むふ
 より馬うまを飛とびて濟物浦きりやうらに居ゐり久水ひさみづ三郎ざうと高雄たかたけ
 謙けん三ざうの兩人りうにんが来きり濟物浦きりやうらをのりひどひどり伏兵ふくへい等らハ

何なに事ことなるとの報うべ一同いどう少すくく心こころを休やすめ兩氏りやうしを道案みちあん
 内うちに進まむところへ松岡利治杉村濳武田甚太郎の三名
 も来き會あひれば互たがびり力ちから付つて久水ひさみづが騎うり来きり馬うま
 を楓かえで玄げん拵しやうふ與あへ先まづ馳かせて濟物浦きりやうらに至いたりて舟ふねの用意ようい
 成なるを高雄たかたけの馬うまを花房公使はなぼうこうしに進まめイザ乗のりたま
 へと云いへバ公使こうしの傍かたわらへ在あり浅山あさやま向むかひ御邊ごへんハ傷きず
 を負おひれば定さだめて行歩ぎんぷ難義なんぎならんとの馬うまに乗のりま
 よくとよくとふふ浅山あさやまハ辭退しじたいして我傷われがきずを受うけりて左ひだりのこ
 苦痛くるしみふとえぐとさみも何なにも貴官きくわんとて此馬こゝのうまに乗のり玉たま



傷者やうしやを

援えんけて

公使こうし

濟物浦さいぶつうらよ

走はしる

の
圖ず

ふぞ至當なりゆとて、ぐひみ讓りあひて果しなをん
 バ傍らより進めて公使と淺山と合鞍入乗せ立ち出ん
 とをさるとさ後の山より狙ひ定めてズドンと一發小銃
 放せしものあり、が幸ひみして公使も中らび各々
 相戒りめて左右も氣を配り濟物浦に着きこのなり、こな
 たを駆け廻りて土人を募り小舟を出させてとせよ取
 乗り七八甲へ、うら月尾島に渡り、が近藤水野
 その下の負傷者等十八人も後まで濟物浦に至り、う
 みの既み渡るべき船をさそを中らゆみして一艘を奪

ひ得られ漕ぐ人なく又櫓擢もなせしが銘々手を擢
 みして潮流箭の如き川を横切り漸く入りて岸に着
 き公使の一行と會合し、とせむこの月尾島も長く止る
 べきよあらば外國蒸氣船が南陽灣に碇泊をると聞け
 ば是も便船して兎も角もせんまりならその小舟も
 て海濤を志のぎゆのんこと心元なく進退し、極ま
 りて如何にせんと額をうつ免集議し時を移せしが所
 詮止る居らう、みもあらね命を海若と委ねて舟を
 出せとて一同小舟に乘移り沖に向つて漕ぎ出せり



海中に漂ふを救ひて
 他船より求む
 圖 3



廿五日の朝なり〜が逆風の為め舟進まば海上に漂
 ふ〜と一昼夜全トが廿六日の朝も霧の晴間不極
 の見ゆる正〜外國船と相違なり〜とて曩も公使館
 を出るとき護り来り〜國旗を出し竿頭に掲げて目標
 とす〜救ひを求め〜午後三時〜彼船よ〜とを
 見附け直ちよ小船を漕ぎ寄せ〜一同本船へ助け乗せ
 見せば英國測量船と艦長其他も知る人なれば款待
 最もたふかりならん此處の沖溜島の沖ありて濟物浦
 よりハ十五海里を遠く隔て〜海上よ〜今朝の霧深り

らすバ他ハ航行せむ目的なり〜ハ滞留〜甲斐あ
 りて諸君を救ふ〜と心得〜と艦長何某が語せりよ
 一公使ハ朝鮮國王殿下又書を呈さる〜難を避けて此
 處に到るの事由と近日再び渡航を乞ふ事とを云ハ贈
 りや〜同文司觀察使ハ暴徒の爲りよ死〜る者の埋葬
 の事と生死詳〜る者ハ救護を請ふ事とハ書き認
 め外ハ堀本中尉(此時安否未〜知〜)と贈る一書とを
 此處まで伴へる韓人の船主と托〜て觀察營朝鮮の役
 所〜出すべ〜とて歸〜やらせこの夜十時又英船ハ件

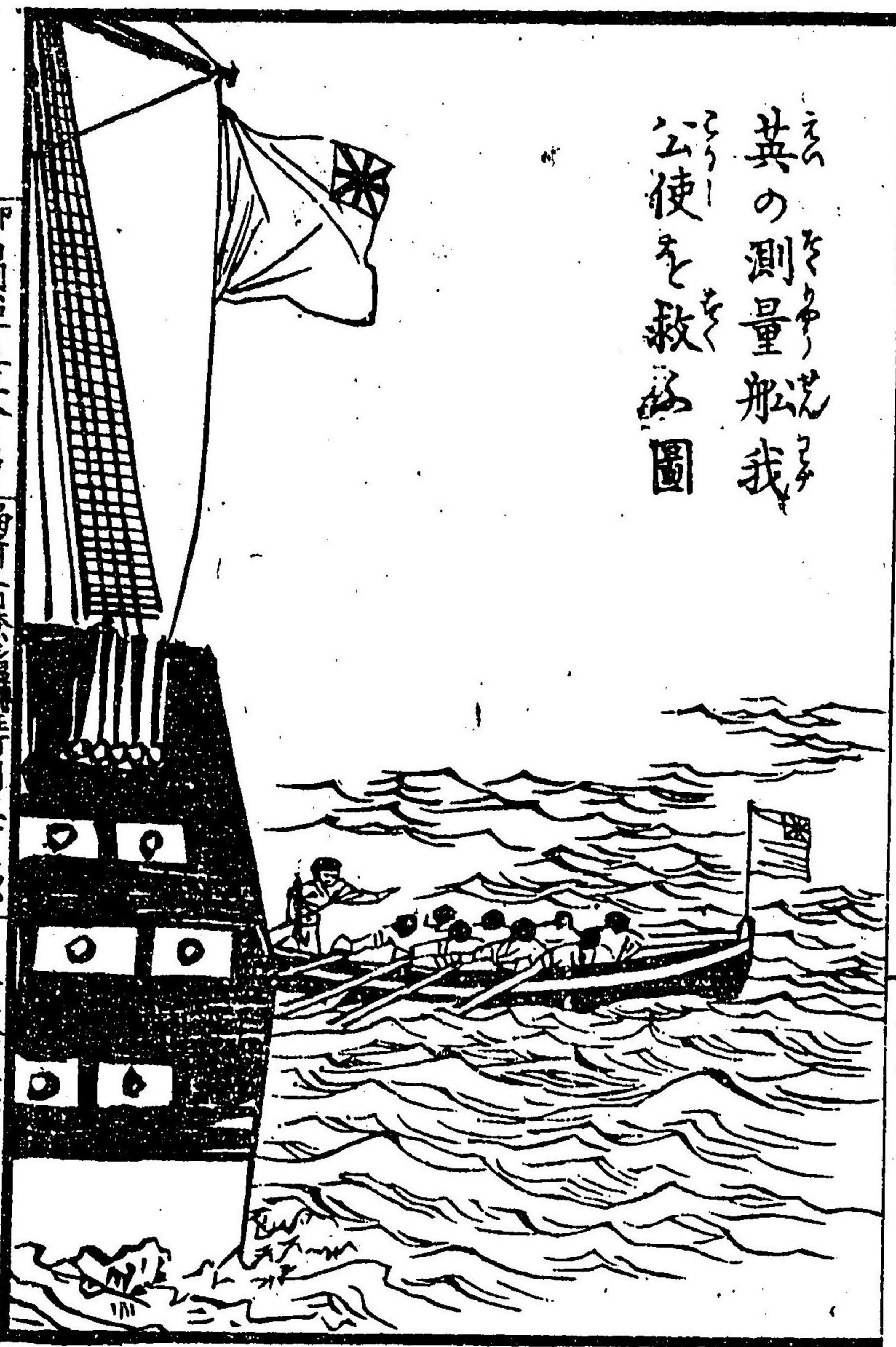
の沖合を抜錨―長崎さして廻航―廿九日一同恙なく同港へ着―りとぞ

編者曰花房公使が長崎に帰着―此變を外務卿に報
びらるゝや否大臣諸参議内閣に會合―種々評議の
未井上外務卿の馬関に出張―此處に事務所を設け
花房公使をして再び彼國に遣―護衛の爲るとて日
進天城等の諸軍艦を艦―八月十日馬関を發―彼地
に向つて進航せりこの事變に付て花房公使の如何
なる談判を開らるゝや又彼國政府が奈何なる返答

をなすや此稿を起るとして未だその報を得るに由
なきれども尔後の報知を待て續々編出―看官の意
は充んとす
又曰ふ朝鮮暴徒が不意に我公使館を襲ひしる原由
及び彼國內亂の状況は次篇を讀で知らるゝとぞ

繪本朝鮮異聞二篇了

英の測量船我
公使を救ふ圖



御編者 岡本竹二郎 出版人 小林鉄次郎

小倉山 昔時新話 東書堂正作

算術教授書 全

鼠藏甲子真聞編 東書堂正作

人民必携交際義務 目

延壽百人一首 全

大日本海陸全圖 銅版 全

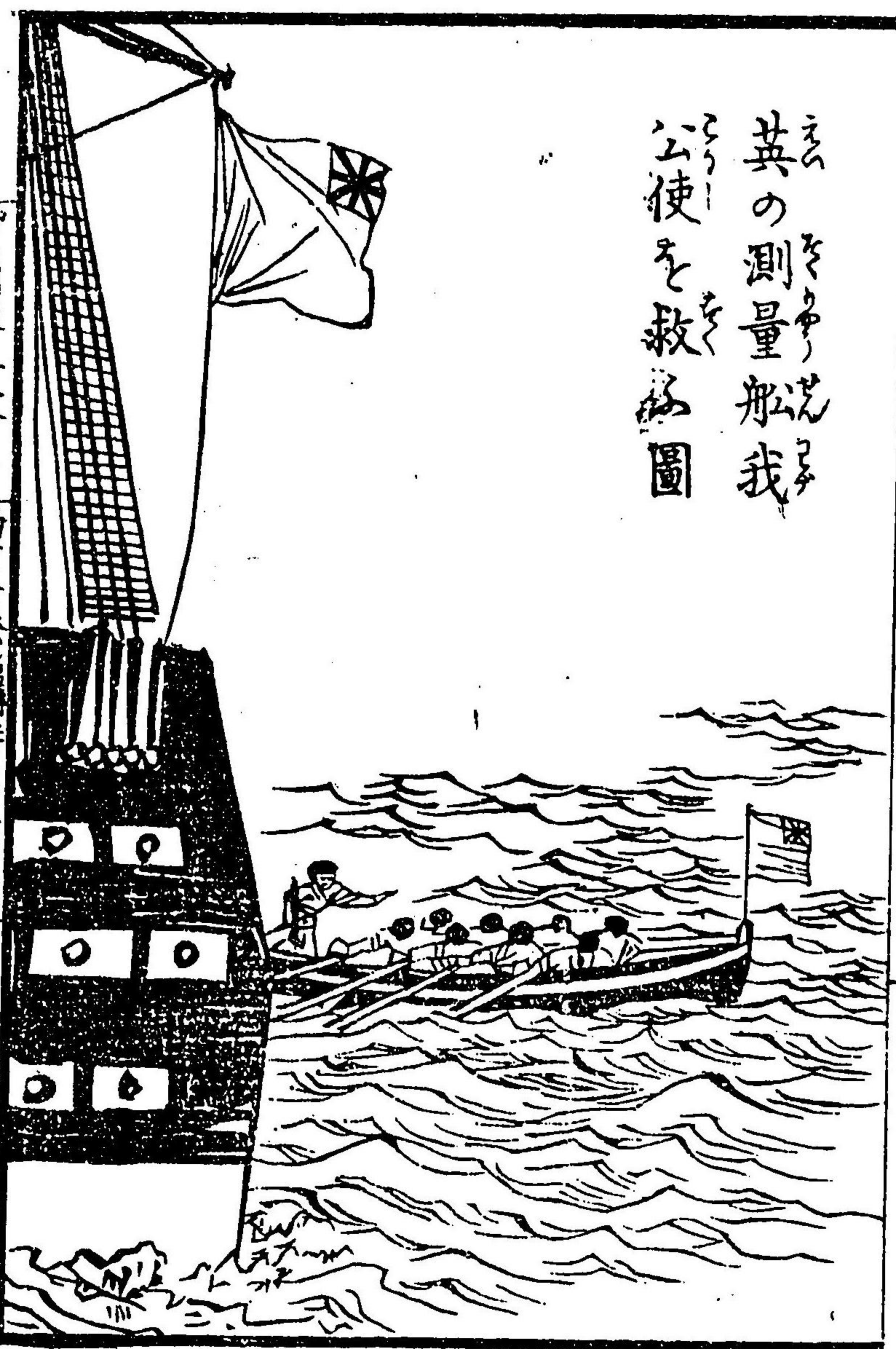
地本錦繪問屋

東京日本橋通三丁目三番地
延壽堂 林丸屋 鉄次郎 版元

白縫物譚 豊國

昔の物語... 故に種有稿種彦作
本板有壽堂主人古今
日新同社にて復編と
多板有るもの故に
河氏にて板有る一層
本今引の板有る者
陸橋以来にて伏て
六十四編板板元版白

英の測量船我
公使を救ふ圖



御廟洋五年六月五日 編輯人 日本圖書正 岡本竹二郎 出版人 全通三行目 小林鉄次郎

小倉山 青樹策 昔日新話 泉堂亭是正作 櫻齋房種画

算法教授書 全

鼠藏甲子真聞 泉堂亭是正作 櫻齋房種画

人民心携交際義務 目

延壽百人一首 全

大日本海陸全圖 銅版 全

地本錦繪問屋 東京日本橋通三丁目十三番地 價目 延壽堂 林丸屋 鉄次郎 版元

白縫物譚 豊國 著 故人種貞稿種彦作 系板菊壽堂主人由今 日之新聞社より復編と 事板菊のふん板のふん板と 河氏よりとて板菊より一房 巻合しつた板菊を看書方 陸橋の求とて伏て希ふ 六十四編と板菊の板元

